

西田 松尾議員は4期13年、橿原市で市議会議員をされているのですが、なぜ29歳で政治家をめざそうと思われたのですか。

松尾 大学の時に政治経済を学んでいたのですが、2000年に地方分権一括法という法律が通り、これからは地方の時代になると授業でも先生がおっしゃっていた、そんな記憶が残っていたのです。その後、ご縁があって前田武志さんという国会議員の事務所をお手伝いするようになり、2003年に知事選挙がありまして前田さんが挑戦されました。その時に知事選挙とはどういう選挙なのか、というより知事はどういう仕事をされているのか、ほとんどわかっていなかった。地方分権の法律が通るまでは国の委任事務で、8割がた国で決まったことが県に下りてきた。それが地方分権の時代になってこれからは県でいろんなことが決められるのだということになり、知事がすごく大事というか首長の仕事がすごく大事だなと思ったのが一番のきっかけでした。そのあとに一番衝撃的だったのが夕張市の財政破綻、あれが2007年でした。その時に2007年の奈良県の決算資料を見ていましたら、全国で21団体が赤字になっていたうちの7つが奈良県内だったのです。これは奈良県の政治をなんとかしないとイケないなという高ぶりがありまして。まあ何ができんねん、というのがあったかもわからないですが、29の時にエイヤツで出てしまいました。

西田 13年経って4期ということですがけれども橿原市議会におけるなにか特に自分の印象に残っているようなことを教えていただければ。

松尾 大和八木駅の周辺に住まわしていただいていますけれど、私が初当選後、リーマンショックが起きました。リーマンショックの後、大和八木駅の周辺が空き店舗やスーパーの撤退、また近鉄百貨店までが撤退するという話が出てきまして、奈良県内、大和八木駅前の商業地域を何とか守りたいという思いがあり、当時の森下市長とともに中心市街地の活性化を進めようということで舵を切りました。それから10年かかったのですが、八木駅前の塩漬けだった土地に複合施設の建設があったのです。あの時は市を二分するような凄い選挙になってしまったのですが、やはりなにか物事を進めようとする時には必ず賛成の方々もいらっしゃれば反対の方もいらっしゃる。そこでちゃんと丁寧に説明して、市民の信任を得たうえで政策を進めることの大切さがわかって、あれから10年経ちましたけれども、一番結果が出ていることは土地の価格が上がってきたこと。ちょうどリーマンから下がって、V字で上がってまだ上がっているのです。さらに八木駅の乗降客数。どの駅も乗降客数が下がってきているのですが八木駅はあれ以来また乗降客数が上がりました。それから商店街の組合員数も一時50を切りかけていたのですが、それがいま93店舗と賑わい

が出てきました。

西田 百貨店も相乗効果になっていますね。

松尾 はい。檀原市の税収も上がってきました。そこでコロナが来てしまったのです。

西田 檀原の八木駅が活性化することで南北にも東西にも影響してきて、非常に意味があるなと思っています。そんなところでコロナが今年の1月に初めて日本で感染者が出て以降、檀原市の中でも当初混乱はあったと思うのですが、いろんなコロナ対策というものをやられているかと思うのですが、その辺は市議会の中でどんな議論があったのでしょうか。

松尾 自治体のコロナ対策本部があるのですが、市長がトップになり、あとの構成メンバーは全部、市の部長なのです。その方々だけで共有されて何か対策を練ろうと思ってもやはりなかなか難しい。

西田 そうですね。現場とちょっと離れた方ということですよ。

松尾 はい。では実際に商店主さんがどういうことを思われているのか、子育てしている保護者の方がどう思われているのか。はたまた学校現場がどう思われているのか、というのはやはり現場からの声を聞かないといけないということで、そういう意味では我々議員の役割というのがすごく問われた半年だったと思います。

西田 自治体独自でいろんな施策を上乗せするというのはやはり予算的に大変難しいものなのではないでしょうか。

松尾 そこは考え方が違って、国と県の方で施策を決めたとしても、やはり市民の声は反映されないのが最大公約数的なことを決められる。そして市の方が国の補助金が早く来ないか、県の補助金が早く来ないかと上ばかり見ているのですね。

西田 財源の問題がありますからね。

松尾 しかし実際にお話を聞くと例えば夏休み期間がずれたりしたじゃないですか。それで給食調理員の方々が、そんな暑い中給食を作るのかと。給食調理室にクーラーもないとか、そうした現場のことが見えてくるのですね。普通教室は全部ついているけれども給食調理室には無かった。例えば僕の近所の学校だったら5年生がすごく多い。じゃあその5年生が一つの教室になるとまた密になるから多目的の広い教室を使いたい。そこにクーラーがない、ということがわかってきて、やはりこういう政策というのは市独自で早くうっていかなければいけない。その時からずっと今まで言っているのですが、今年度の人のたくさん集まるイベントを中止し、不要額が出たらそれを年度末まで置かずに予算を組換えてでもコロナ対策をどんどんやってください。また市の方でも17億円の何にでも使

える貯金があるのですが、その基金を思い切っていま使わないと。櫃原市に納税していてよかったなという街にしないといけないなということでそれは一貫してずっと議会で言っています。

西田 ああいうことは突然来るので、何の準備もしていない中で起きる。緊急事態こそ真っ先に現場、自治体の中で吸い上げて、そして県、国に要望をあげ判断をしてもらわないと、国からの判断だけではなかなかニーズに合わないということですね。まだまだコロナは収まっていないのでこれからも引き続きその対策は必要かなと思っています。

いろいろお聞きしたいことは13年間やってこられたのでいっぱいあると思うのですが、駅前開発の先が見えてきた、成果が見えてきたとおっしゃっていましたが特にこれは必ずこうやりたいとか、櫃原市はこうあってほしいとか、実現可能なものも、それから実現させたいというものも含めてお聞かせください。

松尾 いつも西田会長ともお話しさせていただいたり、アドバイスをいただいている中でやはり「女性活躍社会」があると思います。ソフト面で言いますとやはり保育士不足というのがあります。櫃原市はいま待機児童が200人を超えているということです。一時僕らもこども園のことでがんばった時などはもう50人を割っていたのですが、また200人を超えている。箱

を造ればいいのかと言えばそうではなく箱は現在でも 890 人ぐらい受け入れるキャパはあるのですが、保育士不足なのです。もう 1 割ぐらいは空いているのです。受け入れていないのです。その辺もソフト面で処遇改善が。

西田 募集するけれども来ないということですか。

松尾 そうです。国あげてのことにはなると思うのですがやはり処遇改善して働きやすい環境を市の方からつくっていかないと。

西田 保育所とか幼稚園の職場は 9 割以上が女性の職場なのですね。有資格者はたくさんいらっしゃると思うのです。200 人待機児童がいる中で箱はあるのに人がいない。待たれている保護者からすればジレンマというか、働きにも行けないということ。その辺で具体的になにか考えておられることはありますか。

松尾 檀原市だけでなかなかできない問題かなとも思っていて、県として広域でやらないと隣近所で足の引っ張り合いをしても根本的な解決にはならないのかなという感じはしています。女性の方々が働きやすい環境という意味ではまずやはり議会から改革しないとあかん、という思いもあるのです。これから若い議員さん、僕が初めて当選させてもらった時は結構年上の方ばかりだったのですが、今は年下の議員が何人も出ているので

やはり若手でいろんな議会改革をますます進めたいなという思いがあります。オンラインのことであったりとか。

西田 今までやってきたことを同じようにやるのが当たり前みたいな風潮があるのでそれを変えていくというのはなかなか勇気のいることだと思いますが、ぜひ松尾市議に頑張ってください議会改革をすることで市が変わっていくということですね。最後に言い残したことは。

松尾 コロナ禍において現場の方々がものすごく不安になられていて少しでもその不安が解消できるように我々が現場に足を運んでいかなければいけないと思います。市役所の中でも縦割り行政です。コロナの問題であっても、これは教育委員会、これは健康増進課と全部別れている中を我々が横断的に横串を刺していくような動きをすることが求められていると思います。困っている方々にもこちらからどんどん心を寄せて一人でも取り残さない、そんな政治をこれから求められていると思いますし、我々が率先して檀原市でやっていかなあかん、と思っています。

西田 よくわかりました。現場にあるということですね。政治も生活も変わっていくし課題も変わっていく中で敏感になってその時の政治に活かしていくということで、松尾議員にはぜひ頑張ってくださいと思います。今日はお忙しい中ありがとうございました。